



「友子」の墓

昨年末、足尾銅山を見にいきました。JRの日光駅から路線バスで50分ほど。桐生からわたらせ渓谷鐵道で80分だそうです。「カモシカが見えます」という看板がある谷あいには、7kmほどの長さで広がった町です。かつては日本一の銅山。最盛期は4万人の人口がありましたが現在は2千人、コンビニが見当たりません。

足尾は鉱毒事件や労働争議でも有名です。大正時代には、飯場頭の不正に対するストライキが暴動状態になり、軍隊がそれを沈静化させたこともあります。それがきっかけとなって足尾銅山の飯場制度が改革され、近代的な労務管理が始まったといわれています。



中嶋哲夫の「人事も歩けば」

足尾で、飯場制度があったころの友子の墓をいくつか見てきました。

友子は江戸時代に発生し、大正年間には消滅した鉱夫の相互扶助の組織。親方に弟子入りし、3年3月10日の修行を積むと、「友子取立免状」を与えられます。免状があると、相互扶助を受けることができます(たとえば、障害への支援、仕事の紹介など)。また、身寄りのない親方が死去したときには、子分が弔うという習慣もありました。共済や保険制度がない時代の助け合いの仕組みであり、技能養成の仕組みでもあったといわれます。

友子のお墓は、最も上流にある赤倉・龍蔵寺の境内にありました。9基あるそうです。筆者が確認できたのは3基。その1つは「渡



▲渡坑夫共同供養塔

坑夫共同供養塔」。11人の親分と5人の兄分が祀られています。建立したのは、子分や弟分。各々の名前と出身地が、上下一対で刻まれています。出身地の範囲は、下野、上野は当然として、越中、羽前、安房、陸奥、能登等に広がります。遠くからきた身寄りなき親分を子分が弔う。淋しさと暖かさを感じます。

友子の墓をみているとき、富岡製糸所の「工女の墓」を思い出しました。町中の墓地の一角に小さな墓石が並んでいます。身寄りのない工女を仲間が弔ったのだと思います。

友子の制度を維持する負担は小さくはなかったでしょう。工女の墓を建立する負担も小さくはないでしょう。しかし、社会保険が不在の時代に、相互扶助のために力を尽くした友子や工女。「稼ぎ」だけでなく、「努め」にも注力した働き方を、忘れないようにしたいと思います。

(MBO実践支援センター代表 大阪商業大学特任教授)

